



水上瀧太郎全集

九卷

昭和十五年十二月十日印刷  
昭和十五年十二月十五日發行

水上瀧太郎全集 九卷

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所 岩波書店

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

## はしがき

古代希臘アゼンスに於ては、人民の快こゝろよしとせざるものある時、其の罪の有無を審判することなく、公衆の投票によりて、五年間若くは十年間國外に追放したりといふ。牡蠣殻かきがらに文字を記して投票したる習慣より貝殻追放の名は生れしとか。

今日人こんにちは此の單純野蠻なる審判を吾等には無關係なる遠き代のをかき物語として無關心に語り傳ふれども、熟々つらつらおもん惟ただみるに現在吾々の營める社會に於ても、一切の事總て貝殻の投票によりて決せらるるにはあらざ

るか。厚顔無智なる彌次馬が、その數を頼みて貝殻をなげうつは、敢てアゼンスの昔に限らず、到る處に行はると雖、殊に今日の日本に於てその甚しきを思はざるを得ず。その横暴に苦しみつつ、手を束ねて追放を待つは、潔いさぎよきには似たれどもわが生身の堪ふるところにあらず、果して多數者と意嚮を同じくするや否やはしらずといへども、如かず進んで吾も亦わが一票を投ぜんには。(大正六年冬)

## 目次

|               |       |    |
|---------------|-------|----|
| はしがき          | ．．．．． | I  |
| 新聞記者を憎むの記     | ．．．．． | 一  |
| 「文明一周年の辭」を讀みて | ．．．．． | 二四 |
| 「幻の繪馬」の作者     | ．．．．． | 二七 |
| 永井荷風先生の印象     | ．．．．． | 二九 |
| 「八千代集」を讀む     | ．．．．． | 三〇 |
| 愚者の鼻息         | ．．．．． | 五〇 |
| 「その春の頃」の序     | ．．．．． | 六八 |

|              |     |
|--------------|-----|
| 「心づくし」の序     | 八一  |
| 「海上日記」の序     | 八二  |
| 購書美談         | 八四  |
| 向不見の強味       | 九七  |
| 先生の忠告        | 一一九 |
| 本年發表せる創作に就いて | 一四三 |
| 「末枯」の作者      | 一四五 |
| 女人崇拜         | 一六七 |
| 泉鏡花先生と里見弴さん  | 一八二 |
| 初夢           | 一九九 |
| 此頃の事         | 二二一 |
| 妾の子          | 二二九 |

|                  |     |
|------------------|-----|
| 札の辻——櫻田門         | 二三七 |
| 余が愛讀の紀行文         | 二四九 |
| 秋聲花袋兩氏祝賀會に際し余の感想 | 二五〇 |
| 戯曲に對する壓迫と國民性     | 二五一 |
| 「雪」を見る前後の感想      | 二七七 |
| 予が本年發表せる創作に就いて   | 二九〇 |
| 日曜の痲癢            | 二九二 |
| 「新樹」雜感           | 三〇五 |
| 新劇運動の回顧及び希望      | 三一五 |
| 麴麩と扇             | 三一六 |
| 「御柱」雜感           | 三三三 |
| 「第一の世界」雜感        | 三四四 |



|            |     |
|------------|-----|
| 鎌田榮吉先生     | 三五六 |
| 赤坂の家       | 三五八 |
| 先驅者        | 三七六 |
| 素人芝居       | 三八七 |
| 世界的        | 三九九 |
| 撒水車        | 四一〇 |
| 「明窓集」の序    | 四二六 |
| 大人の眼と子供の眼  | 四二七 |
| 「含羞」の作者    | 四四二 |
| 所感         | 四六六 |
| 友人久保田万太郎氏  | 四七四 |
| 帝國劇場の質問に答ふ | 四七六 |

|                 |     |
|-----------------|-----|
| 都新聞讚美論          | 四七八 |
| 畫家仙波均平氏         | 五〇〇 |
| 紙屑              | 五一六 |
| 友はえらぶ可し         | 五二〇 |
| はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記 | 五三三 |
| 永井荷風先生招待會       | 五四七 |
| 或日の小山内先生        | 五六四 |
| 築地小劇場に就いて       | 五七一 |
| 青山の家            | 五八五 |
| 我家の犬            | 六〇六 |
| 倫敦時代の郡虎彦君       | 六二八 |
| 人真似             | 六四七 |

廉賣

.....六五六

後記

.....一

## 新聞記者を憎むの記

大正五年秋十月。

八月の中旬に英京倫敦を出た吾々の船は、南亞弗利加の喜望峯を廻り、印度洋を越えて、二ヶ月の愉快な航海の終りに、日本晴といふ言葉が最も適確にその色彩と心持とを云ひ現す眞青な空を仰いで、静な海を船そのものも嬉しさうに進んで行く。左舷には近々と故郷の山々が懷を開いて迎へてゐる。自分は暁から甲板に出て、生れた國の日光を浴びながら、足掛け五年の間海外留學の爲に遠ざかつた父母の家を明瞭に想ひ浮べて欣喜した。

勿論自分は後にして來た亞米利加、英吉利、佛蘭西に楽しく過した春秋を回顧して、恐らくは二度とは行かれないそれらの國に、強い悔恨と執着を残したことは事實であつた。けれども、過ぎ去つた日よりも來るべき日は、より強く自分の心を捕へてゐた。常に晴れわたる五月の青空の

心を持ち、唇を噛む事を知らずに、温い人の情愛なまけに取圍まれて暮す世界を描いてゐた。而してその光明と希望に満ちた世界を、形に現したのが目前の朝日の中に聳ゆる故國の山河であると思つた。

船はもう神戸に近く、陸上の人家も人も近々と目に迫つて來た。昨夜受取つた無線電信によると、九州から遙々姉が出迎ひに來てくれる筈である。東京では父も母も弟も妹も、九十に近い祖母も待暮してゐるに違ひない。その人々にも今夜の夜行に乗れば明日の朝は逢へるのである。日本人には珍しい、狡猾卑劣な表情を持つてゐない公明正大な父の顔、憎惡輕侮の表情を知らない温情の象徴のやうな母の顔が、瞭然と目の前に並んで浮んだ。常に何等か自分の心を打込む對象が無くては生きてゐる甲斐が無いと思ふ自分にとつて、自分程立派な兩親を持つ者は世界に無いと思ふ信念に心のときめく時程純良な歡喜は無い。その父母の家に明日から安らかに眠る事が出来るのだ。幾度も／＼甲板ゆきまを往來して足も心も踊るやうに思はれた。

午前九時、船は遂に神戸港内に最後の碇を下した。船の廻りに集つて來る小蒸汽船の上に姉と姉の夫と、吾々の家の知己某氏夫妻が乗つてゐて遠くから半巾ヘンケチを振りながらやつて來た。約三年間音信不通になつてゐた梶原可吉氏も來てくれた。久々ぶりの挨拶を濟してから、此こゝの二月ふたつきの間、

寒い夜、暑い夜を過して来た狭い船室にみんなを導いて、心置き無い話をし始めた。

其處へ給仕が、二枚の名刺を持つて面會人のある事を告げに来た。大阪朝日新聞と大阪毎日新聞の記者である。勿論自分は面會を斷るつもりだつた。折角親しい人々と積る話をしてゐるところへ、見も知らぬ他人の、殊に新聞記者が割込んで、材料取りの目的で、歐洲の近狀如何などといふ取とめも無い大きな質問をされては堪らないと思つた。然し自分が給仕に斷るやうに頼まうと思つた時は、既に二人の新聞記者が船室の戸口から無遠慮に室内を覗き込んでゐた。二人とも膝の抜けた紺の背廣を着て、一言一行極端に粗野な紳士であつた。勿論吾々の樂しき談笑は、此の二人の侵入者の爲に中斷されてしまつた。彼等は是非話を承り度いと、殆ど乞食の如く自分の前後に立ふさがる。

豫て神戸横濱の埠頭には此種の人々がゐて、所謂新歸朝者を惱ますとは聞いてゐたが、それは知名の人に限られた迷惑で、自分の如きは大丈夫そんなわづらひはないと思つてゐたので、同船の客の中に南洋視察に行つた官立の大學の教授のゐる事を告げて逃げようとした。けれども彼等は承知しない。五分でも十分でもいい、から自分の話を聞き度いと言ひ張る。話は無い、話し度い事なんか何にも無いと云ふと、そんなら寫眞丈撮させてくれと云ひ出した。

これは一層自分には意外な請求だつた。誰人も名さへ知らない一書生の寫眞を新聞に掲げて如何するのだらう、冗談では無いと思つて斷つた。すると傍の姉夫婦が口を出して、寫眞を撮して貰ふかはりに談話の方は許して頂いては如何だと口を入れた。自分も之に同意した。談話より時間の短い丈でも寫眞の方が樂だし、且は此の粗野なる二紳士を一刻も早く退散させ度いと願つたからである。其處で自分は甲板に出た。梶原氏が附添になつて來てくれた。

ちやんと用意して待つてゐた各新聞社の寫眞係りが、籐椅子を据ゑ、いかにも美術的の趣向だといふやうに浮袋を側に立てかけて、扱て自分を腰かけさせた。

馬鹿々々しい事だと思つた時は、もう寫眞は撮つてゐた。それでおしまひだと思つて立上らうとすると、新聞記者は最初の約束を無視して、是非とも話をしてくれと迫つて來た。約束が違ふではないかと詰つても、平氣で、値うちの無いお低頭を安賣りするばかりである。しまひには一分でも二分でもいゝと、縁日商人のやうな事を云ひ出した。それでは五分丈約束するから、その五分間に質問してくれと云つて、自分はかくしから時計を出して掌に置いた。

二人の中のどつちが朝日の記者で、どつちが毎日の記者だつたか忘れてしまつた。後日の爲に名刺丈は取つて置いたから机の抽出でも探せば姓名は判明するが、それは他日に譲らう。兎に角

此の二人は、他人の一身上に重大な關係を惹起すやうな記事を捏造する憎むべき新聞記者であつた。

五分は瞬間に過ぎた。時計の針が五分廻る間に自分が質問された質問と、答へた返答は左の如きものであつた。

第一の問。貴下は外國では何を勉強して來ました。經濟ですか。

第一の答。私は雜學問をして來たので、何といふ一科の専門はありません。但し學校では經濟科の講義を聴講しました。

第二の問。文學の方はやりませんでしたか。

第二の答。私は學問として文學を修めた事は、日本にゐた時も外國にゐた時も、全くありません。

第三の問。今後職業を擇ぶに就ては保險事業をお擇びですか、又は慶應義塾の文科で教鞭をおとりになりますか。

第三の答。私の父は保險會社に勤めてゐますが、それも家業といふのではなく株式會社の事ですから息子も必ずその仕事をするといふ事はありません。慶應義塾になんか行つたつて教へ



る學問がありません。

第四の問。貴下の就職問題に就ての御尊父の御意見は。

第四の答。父は私の選擇に任せるでせう。

第五の問。外國の文藝上の新運動について何か話して下さい。

第五の答。別に新運動なんてものは無いでせう。日本の方がその點では新しいでせう。

恰も五分たつたので自分は最後の一句を冗談にして立上らうとした。するとたつたもう一つ質問し度いと云つて引止められた。

第六の問。今後も創作を發表しますか。

第六の答。氣が向けばするでせうが、兎に角自分なんか駄目です。以前書いたものなんか考へても冷汗です。

傍から梶原氏が、あれは既に作者自身が葬つたものであると、自分の小説集「心づくし」の序文を引いて説明してくれた。

右の如く簡短な質問に對する簡短な返答で苦痛の五分が過ぎた時、自分は後には何も氣がかりな事の残つてゐない爽快な心持で姉や知人の群に歸つた。梶原氏は、自分の新聞記者に對する應